

## 無常を追う日本的無常観

大坂芸術大学 教養課程 教授 純丘 曜彰

たんに日本的無常観ということなら、評論家の小林秀雄『無常という事』(1946)、唐木順三『中世の文学』(1954)や『無常』(1964)などにおいて、すでに多く語られている。それを改めてとり上げるのは、その後、解釈学の劇的進展や史実の実証的解明によって、その理解に疑念が生じているからである。

従来、古典文学研究は、言語写像論に基づき、文章を著者の心情の言語的な映し出しとして理解してきた。これに対して、解釈学では、言語行為論の立場から、文章は著者から読者への、なんらかの意図を伴っているアクションであり、そこに記されている内容は、著者の心情の映し出しなどではなく、読者に影響を与えるための方便にすぎない、とされる。

くわえて、かつては数奇な世捨て人として盛り付けられた伝説がそのまま信じられていた西行や長明、兼好、そして世阿弥、利休、芭蕉などの生涯とその時代背景についても、周辺史料や文章以外の史実の掘り起こしによって、実証的に大きく書き直しが進んできた。このことによって、実際、彼らが書き残した文章と実情との齟齬、つまり、彼らのウソや誇張が露呈してきた。

つまり、ありていに言えば、彼らは、数奇な世捨て人どころか、むしろ巷間の直中であって世捨て人を装う珍妙な俗物だった。それは、彼らの文章以前に、彼らが僧形を取り、仏道を語りながら、みずからは仏門修行そのものに励むことが無かったことにすでに象徴的に表れている。しかし、この有りようは、出家したはずの法皇こそが世俗の権力を掌握するなど、彼らのみの特異な問題ではなく、むしろ日本文化の根幹に係わっているのではないか。

雑駁な言い方ながら、西洋文化は過去から未来へ発展していく直線的な時間観を持つ一方、東洋文化は長期に同じことが繰り返される循環的な時間観を持つ、とされる。これに対し、先に、日本は、四季の短期循環のためか、王朝文化の『古今和歌集』の時代から、反復の中に昨年との違いを意識し、そこに見える喪失の情感、あはれ、を感じる、と論じた。

しかし、このズレ、差延、無常を知るためには、去年と今年との両方をまたにかける時間超越的な視点が必要になる。古くは、やはり院政期に書かれた『大鏡』において藤原摂関家の盛衰を、時間超越的な190歳の太皇太后と180歳の夏山繁樹に語らせている。法皇や僧形の俗物文化人たちがまた、栄枯盛衰を超越する不動不変の立脚点

を得るべく、「出家」を騙ったのだろうが、はたしてうまくいったとは思えない。

というのも、仏教、ことに浄土教や禅は、インド的な輪廻、中国的な易の循環の呪縛に対し、「家」などという永続機構を抜け出し、深山西方を臨み、あえて瞬間、瞬間の刹那に徹することで、無常の直中に飛び込んで、みずからもまた無常になりきることを求める。しかし、僧形の俗物文化人たちは、出家したとはいえ、結局のところ、粗末ながらも庵を建て、人里に寄生。むしろ旧知の人々との親交を以前以上に深めて暮らす。

唐木は、この有りようを「方丈の栄華」と評した。それは、敗者のルサンチマンであり、ニヒリズムだ。つまり、持たざる者は、失うものも得るものも無く、不変だ。それで、渦中の権勢の栄枯盛衰を横目に眺め、これをむなしい「無常」と断ずる。ところが、その言葉は、まさに渦中の権勢そのものに向けて発せられ、それにマウンティングすることで、かえって自身を渦中の上に位置づけようとする試みになっている。兼好が筆を折り、世阿弥や利休が時の権力者から嫌われていくのも、この巧妙な法皇的企図が権力者側から読み解かれてしまったからだ。

今日もなお、脱サラ独立し、田舎暮らしや外国移住などして、その「大所高所」から、日常瑣事に忙殺される一般的な都会の勤労者に向けてモノ言う俗物文化人は少なくない。それは、たしかにある意味、無常からの離脱のように見えるが、じつはむしろ無常への寄生なのではないか。というのも、それは、無常の差延があつて、その差延の超越においてのみ自己の立場が成り立っているからである。つまり、あわれと嘆じる者は、あわれに興じて生きる諸々から疎外されてしまっている。

もともと、この離脱的実存様式は、俗物文化人に限らない。すぐに激昂する能動市民たちのアンガージュマンによって頻繁に暴動が起きる国々とは違って、この国では、源平合戦も、関ヶ原も、戊辰戦争も、しょせん他人ごと。その意味では、安寧で平穏な生活が保たれる理想的な社会形態をなしている。

みずからは無常に浸ることなく、他人の無常を追うことで、その有為転変の差延を眺める永遠不変の存在として、無常の直上にたゆたってみずからの地歩を築こうとする。この奇妙な脱俗的な俗物のありように基づいて、無常観で知られる著名な人々の芸道や作品、そして、それを愛でた人々、連綿と現代に続く無常観を、いま、再理解する必要があるのではないか。